

4. 2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは、生態系の健全さの指標となる食物連鎖網の上位種の猛禽類ミサゴ、チュウヒや、ヤマセミ、カワセミ、セキレイ類などの河川や水辺と関わりの深い種の生息状況を整理し、現在の河川の自然環境について検討しました。

なお、2巡目、3巡目調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を検討するための参考です。

【鳥類の流程での分布状況】

(鳥類調査)

・ 鳥類の流程での分布状況の河川ごとの特徴を把握

鳥類の1kmピッチの確認種数と生態指標別確認個体数を整理しました。

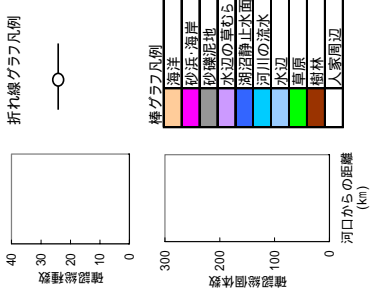
今回とりまとめを行った一級河川13河川では、海岸を指標する種や、樹林を指標する種、水辺を指標する種、河川の流水や湖沼などの静止水面を指標する種などの確認状況が、河口から上流に至るまでの間に河川の植生などの周辺環境に応じて刻々と変化していく様子が確認されました。また、河川によってそれぞれ特徴のある流程分布を示すことが把握できました。

(資料掲載：4-10～13ページ)

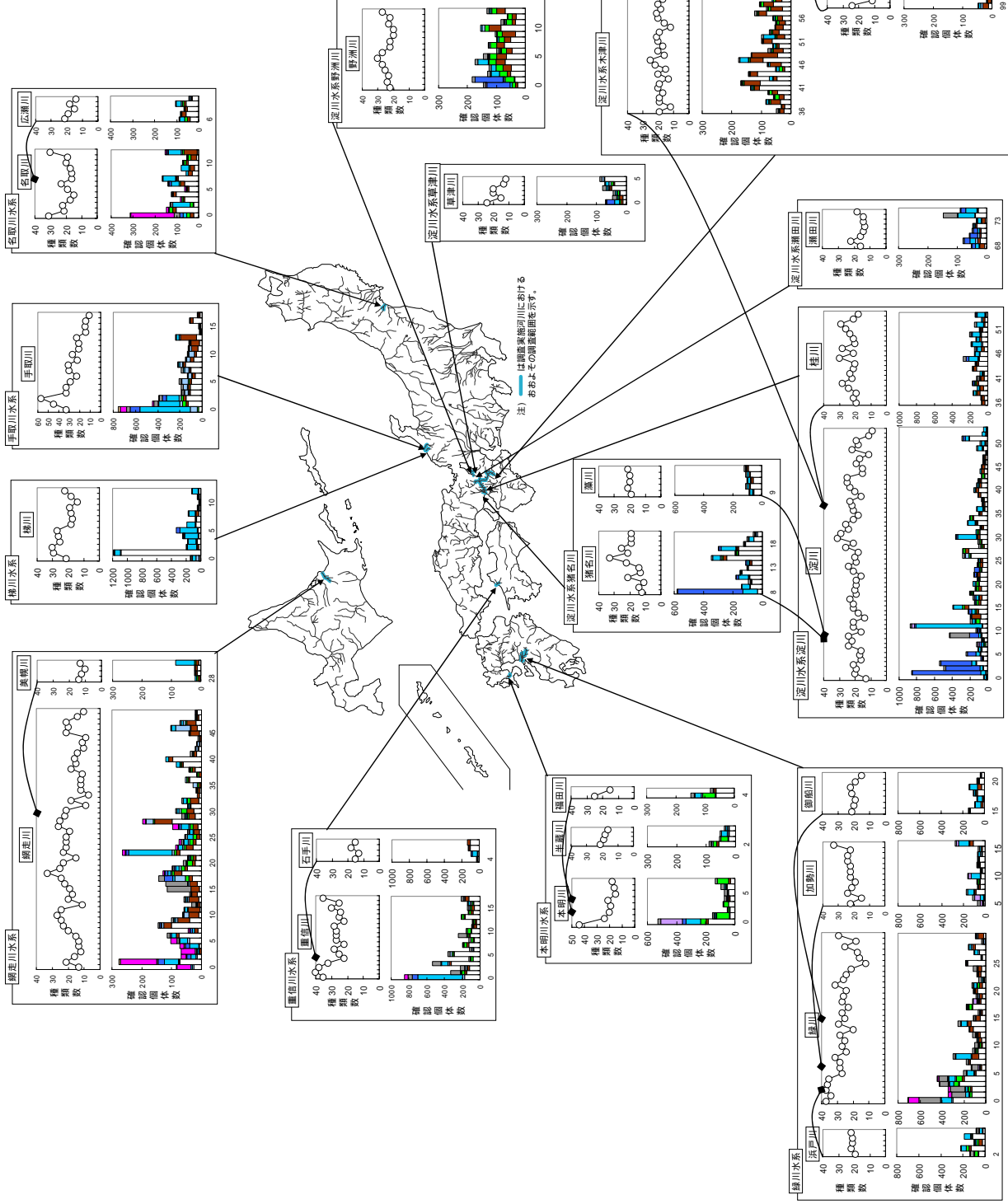
ここでは、鳥類の1kmピッチでの確認種数と、人家周辺を指標する種、海岸を指標する種や、樹林を指標する種、水辺を指標する種、河川の流水や湖沼などの静止水面を指標する種など生態的な特徴を指標する種毎の確認個体数を整理しました。また、それらの個体数組成比率を整理してみました。さらに、参考として鳥類調査を実施した河川の1kmピッチの植生状況を、各河川でもっとも近年に実施された国勢調査の植物調査より整理し、同じようにグラフで示しました。

今回とりまとめを行った一級河川13河川では、海岸を指標する種や、樹林を指標する種、水辺を指標する種、河川の流水や湖沼などの静止水面を指標する種などの確認状況が、河口から上流に至るまでの間に河川の植生などの周辺環境に応じて刻々と変化していく様子が確認されました。また、河川によってそれぞれ特徴のある流程分布を示すことが把握できました。

生態的特長の指標性は、原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>・<陸鳥編>(保育社)を参考にしました。



注1) ◆ は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。
注2) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



鳥類の1km ピッチ種数・生態指標別確認個体数の分布状況(平成18年度 鳥類調査)

種 300
種 200
種 100
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 600
種 400
種 200
種 0

種 1000
種 800
種 600
種 400
種 200
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 800
種 600
種 400
種 200
種 0

種 800
種 600
種 400
種 200
種 0

種 400
種 200
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

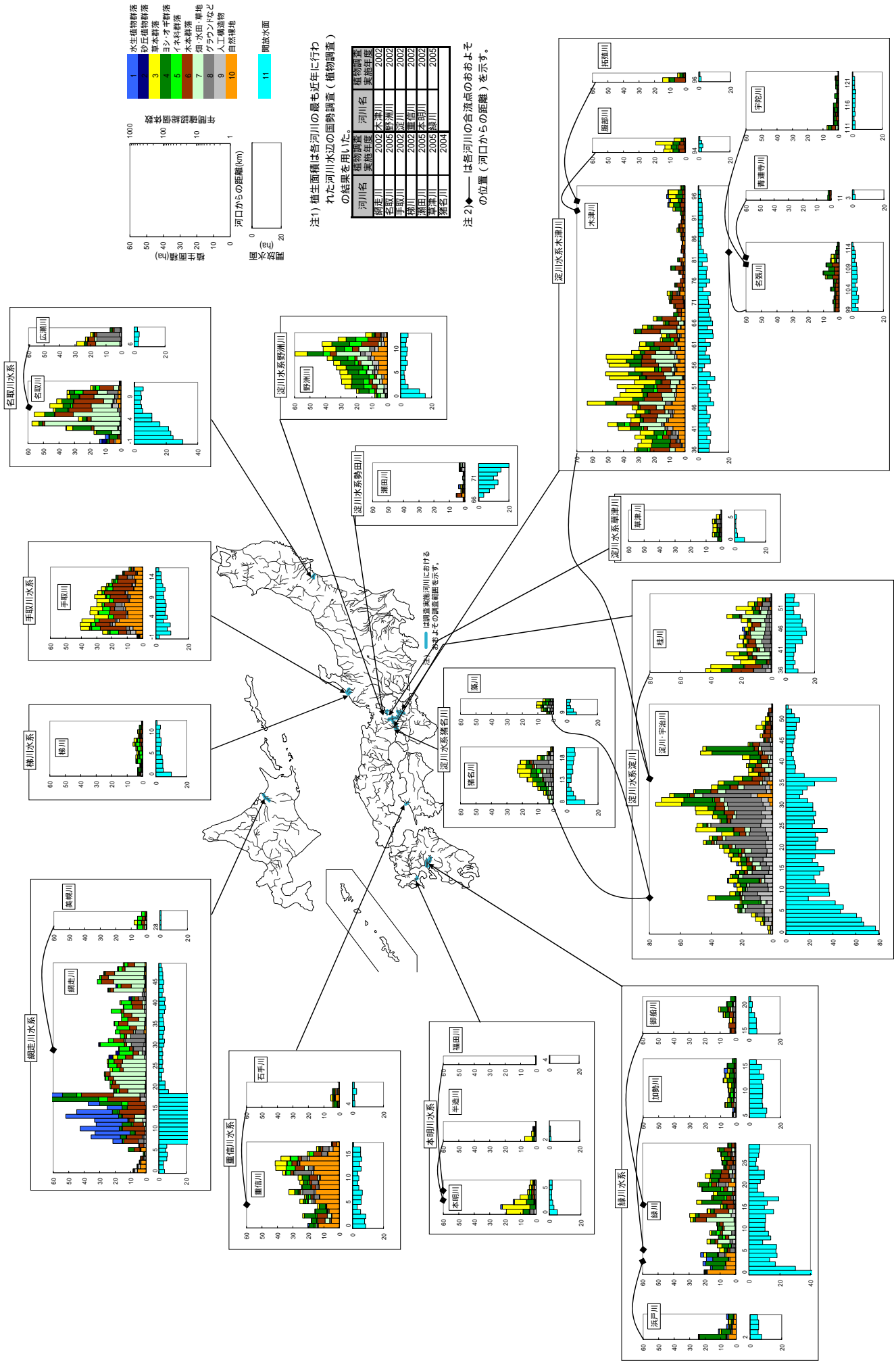
種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

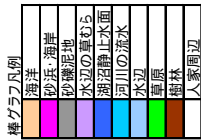
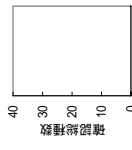
種 30
種 20
種 10
種 0

種 30
種 20
種 10
種 0

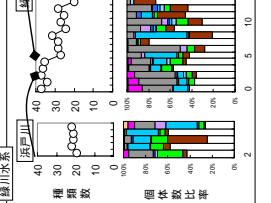
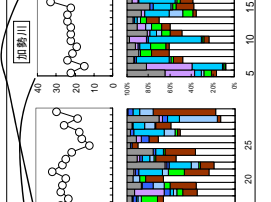
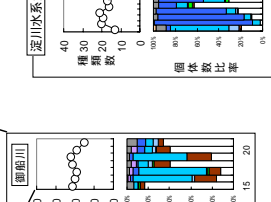
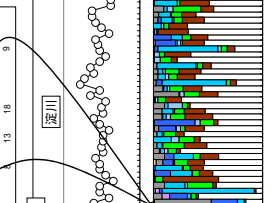
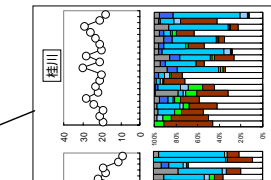
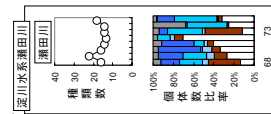
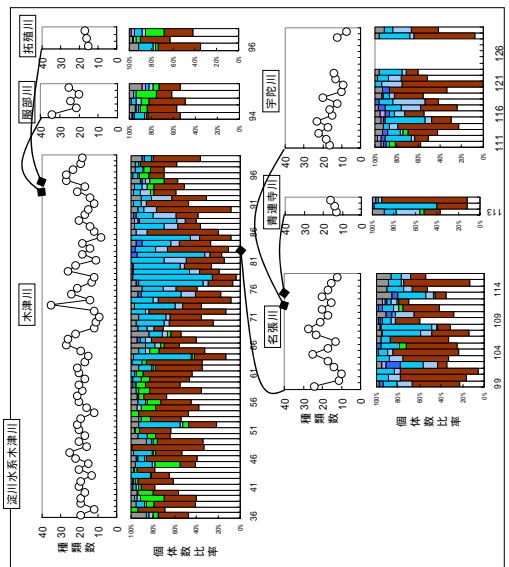
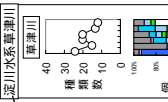
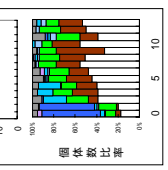
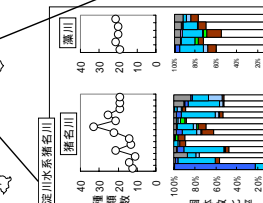
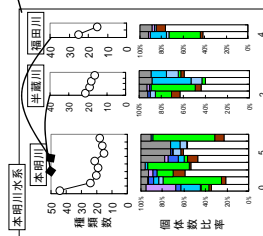
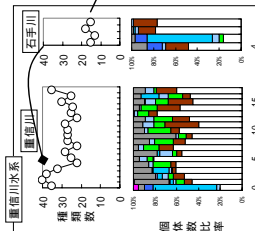
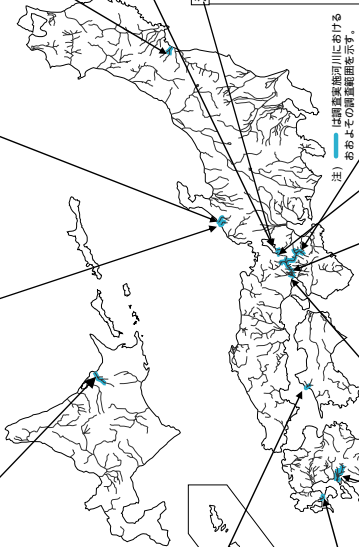
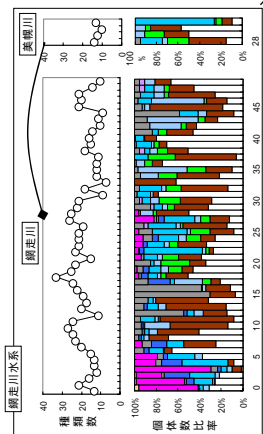
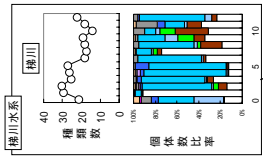
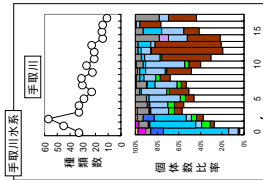
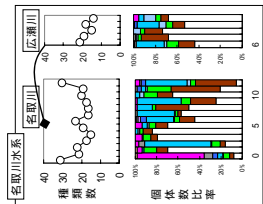
参考図1 平成18年度鳥類調査実施河川の1kmピッチ植生区分の面積



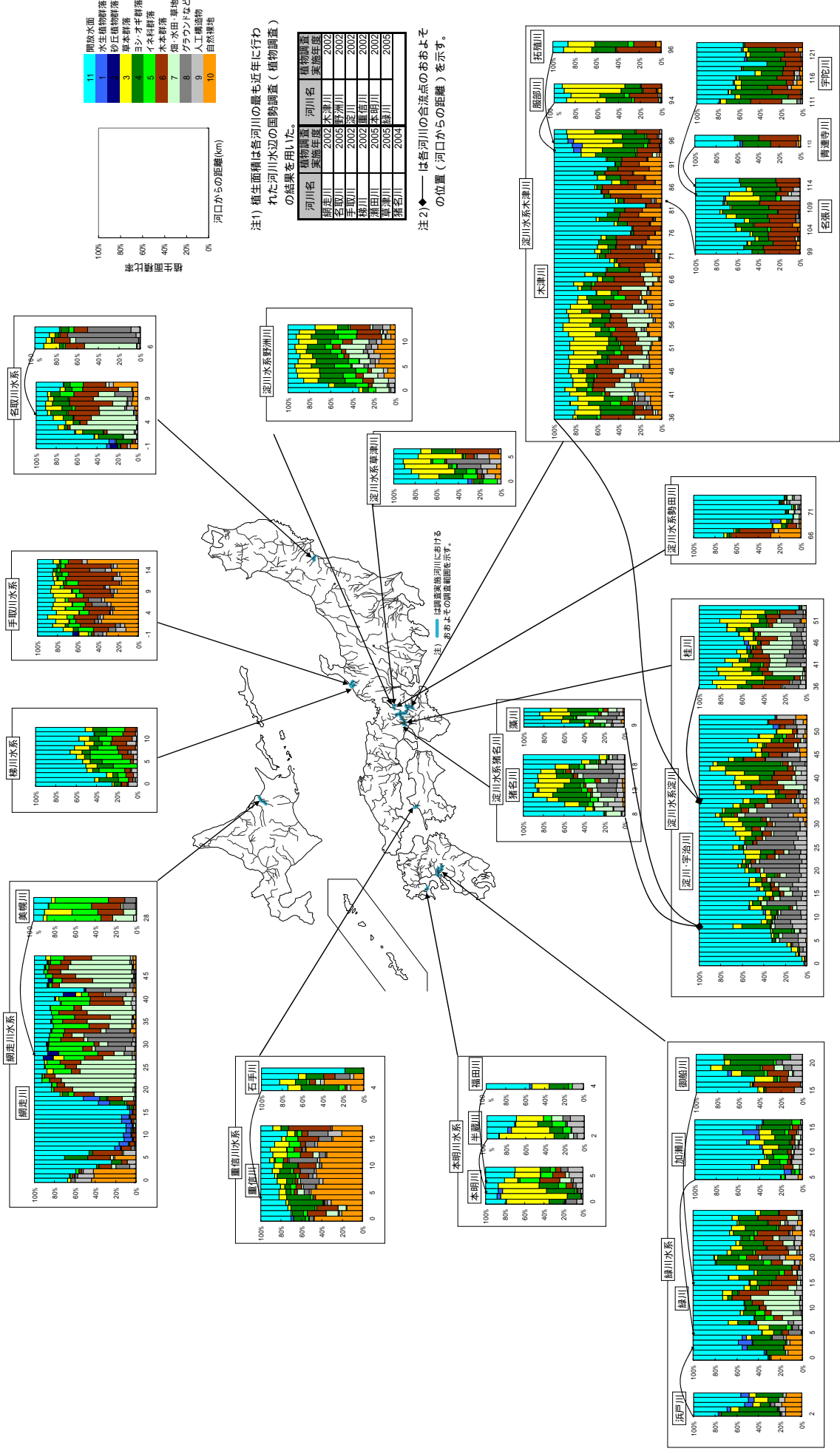
折れ線グラフ凡例



河口からの距離(km)
 注1) ◆は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。
 注2) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



鳥類の1kmピッチの生態指標別(自然環境)確認個体数比率の分布状況(平成18年度 鳥類調査)



参考図2 平成18年度鳥類調査実施河川の1kmピッチ植生区分の面積比率

【種の全国的な分布状況（オオハクチョウ、コハクチョウ）】

(鳥類調査)

・ オオハクチョウを2河川、コハクチョウを1河川で確認

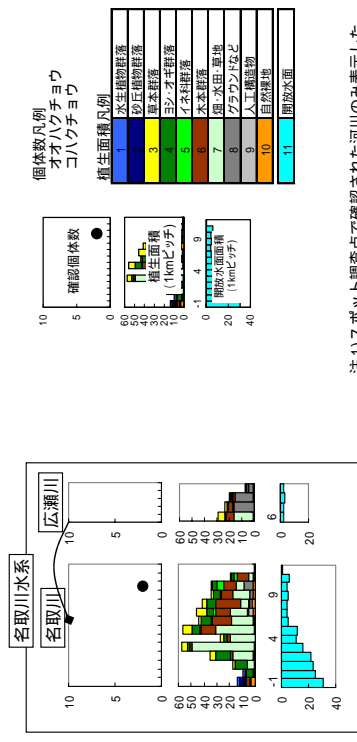
冬の渡り鳥の代表として、オオハクチョウとコハクチョウの確認状況を整理しました。今回とりまとめを行った一級河川13河川のうち、オオハクチョウは北海道地方の網走川、東北地方の名取川の2河川で確認されました。コハクチョウは淀川水系野洲川の1河川で確認しました。

(資料掲載：4-15、4-39～40ページ)

オオハクチョウとコハクチョウは、ともに北日本や日本海側の河川の静水域や湖沼等に冬鳥として飛来します。今回とりまとめを行った一級河川13河川のうち、オオハクチョウは北海道地方の網走川、東北地方の名取川の2河川で確認されました。コハクチョウは淀川水系野洲川の1河川で確認されました。2巡目、3巡目にも調査を行った同じ河川での確認状況を比較すると、オオハクチョウ、コハクチョウとも、確認河川数に大きな変化はみられませんでした。

確認河川数の比較（対象河川：13河川）

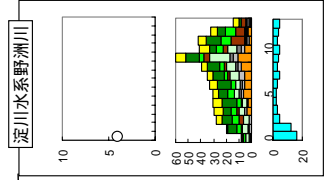
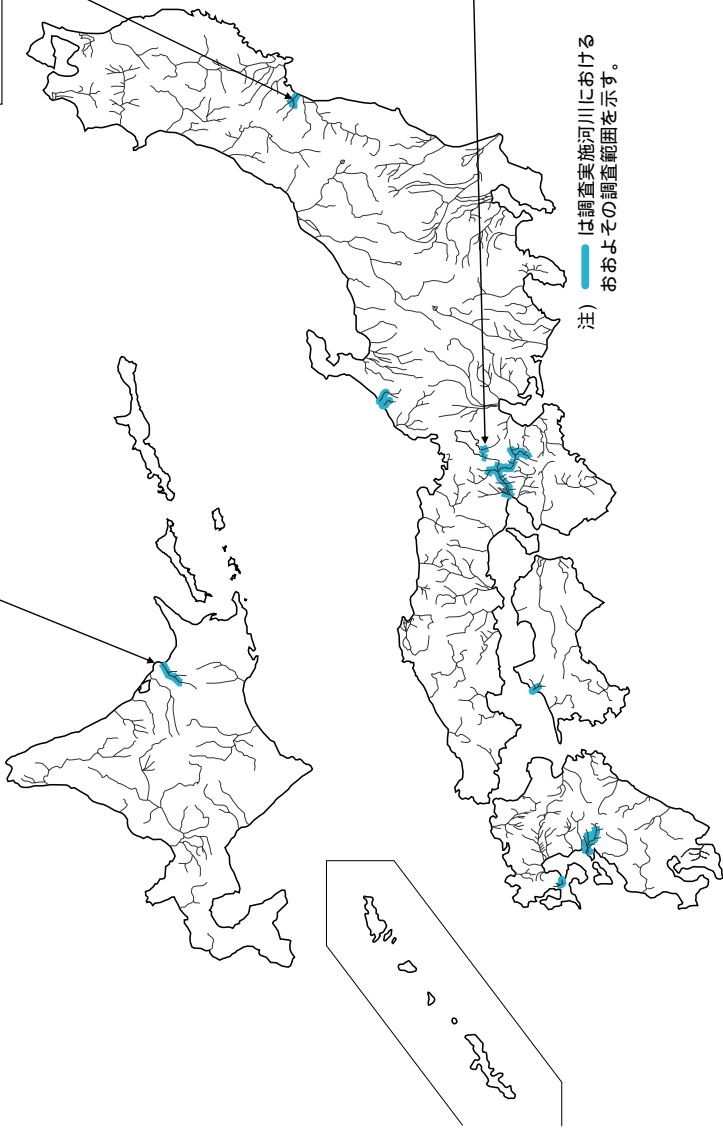
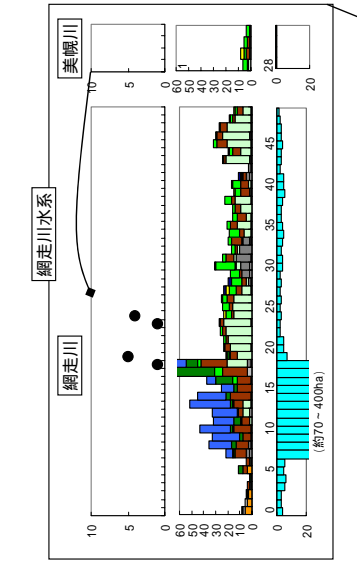
種類	2巡目調査	3巡目調査	今回調査
オオハクチョウ	1河川	2河川	2河川
コハクチョウ	0河川	1河川	1河川



注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
 注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の国勢調査(植物調査)の結果を用いた。

河川名	植物調査実施年度	河川名	植物調査実施年度
細走川	2002	木津川	2002
名取川	2005	野洲川	2002
手取川	2002	深川	2002
綾川	2002	重信川	2002
瀬田川	2005	本田川	2002
菅瀬川	2005	緑川	2005
猪名川	2004		

注3) ◆ は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。
 注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



【高次消費者（ミサゴとチュウヒ）の確認状況】

(鳥類調査)

・ 猛禽類のミサゴは全国の一級河川 11 河川で、チュウヒは 3 河川で確認

水辺の食物連鎖の上位種として、魚を主な餌とし水辺に関係の深いミサゴと、河川のヨシ原などに生息し、ネズミやカエル、小鳥などを餌とするチュウヒについて確認状況を整理しました。

ミサゴは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のうち、全国の 11 河川で確認されました。また、チュウヒは、北海道地方の網走川、近畿地方の淀川水系草津川、九州地方の本明川の 3 河川で確認されました。

(資料掲載： 4-17、 4-39～40 ページ)

ミサゴは、魚を主な餌とする猛禽類で、河川や湖、海岸などに生息しています。環境省のレッドリスト（2006）では準絶滅危惧種に指定されています。ミサゴは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のうち、全国の 8 河川で確認されました。確認された位置は、河口から上流域まで広範囲でした。ミサゴが上流まで確認された河川は、採餌が行えるような広い水面やあるいは豊かな魚類資源を保った場所として注目できます。

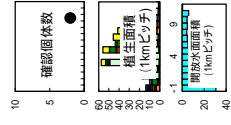
チュウヒは主に冬鳥で、シベリア・極東から越冬のため飛来しますが、北海道や本州中部以北で繁殖することが知られています。ネズミやカエル、小鳥などの小動物を餌とし、河川の中洲のヨシ原やセイタカアワダチソウ群落、平地の広いヨシ原などに生息し、ヨシやスキの茎で地上に巣を造ります。環境省のレッドリスト（2006）では絶滅危惧 1B 類に指定されています。チュウヒは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のうち、北海道地方の網走川、近畿地方の淀川水系草津川、九州地方の本明川の 3 河川で確認されました。そのうち網走川では、繁殖期の 6 月に確認されました。確認された位置は、主に河川の河口から下流域でした。

確認河川数の比較（対象河川：13 河川）

種類	2 巡目 調査	3 巡目 調査	今回 調査
ミサゴ	8 河川	10 河川	11 河川
チュウヒ	4 河川	6 河川	3 河川

集団分布地、移動時の確認を含む。

個体数凡例
ミサゴ
チュウヒ



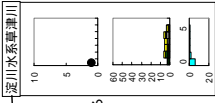
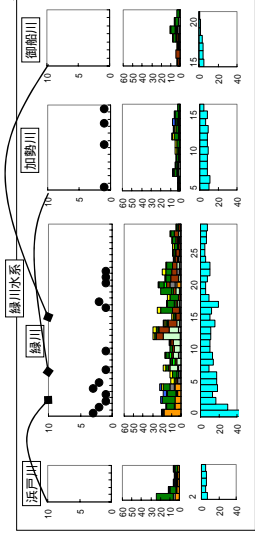
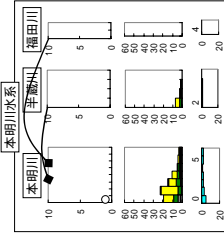
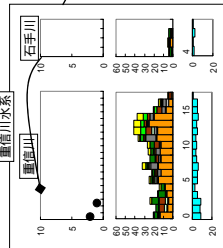
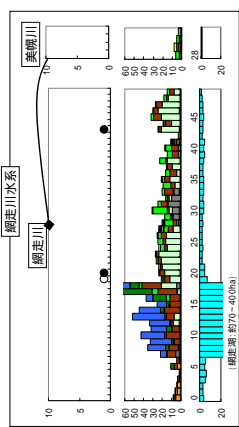
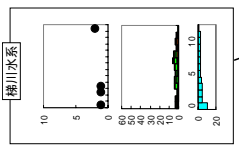
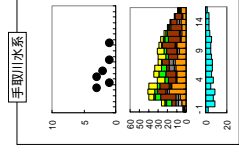
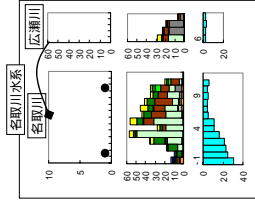
植生面構凡例

1	水生植物群落
2	砂丘植物群落
3	雑木群落
4	コナラ群落
5	イヌシデ群落
6	木立群落
7	田・水田・草地
8	フラフランドなど
9	人工施設物
10	自然雑物
11	開放水面

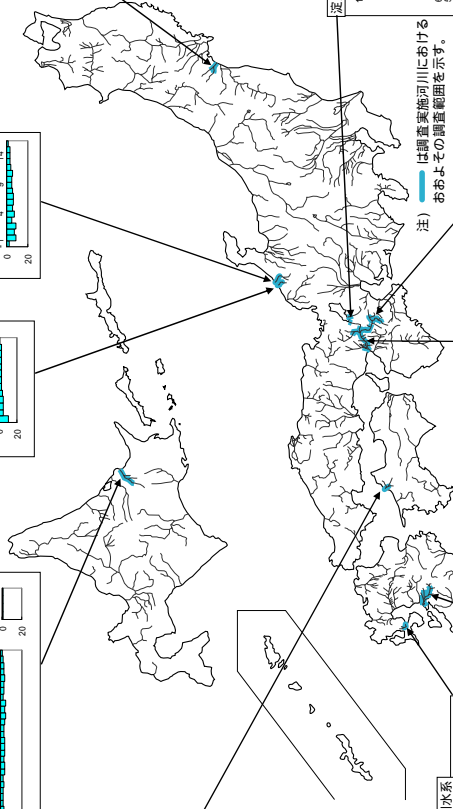
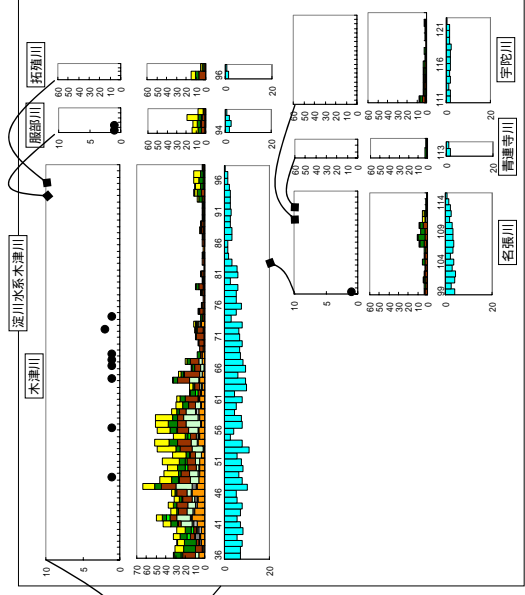
注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
注2) 植生面種は各河川の最も近年に行われた河川水辺の面勢調査(植物調査)の結果を用いた。

河川名	実施年度	河川名	実施年度
駒走川	2002	木津川	2002
名取川	2005	野洲川	2002
手取川	2002	淀川	2002
櫻川	2002	重信川	2002
藤田川	2005	本明川	2002
摩津川	2005	藤名川	2005
藤名川	2004		

注3) ◆——は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。
注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



注) ーは調査実施河川におけるおおよその調査範囲を示す。



ミサゴ、チュウヒの1km ピッチの確認状況(平成18年度 鳥類調査)

・ **猛禽類のオジロワシ、オオワシを北海道地方の1河川で確認**

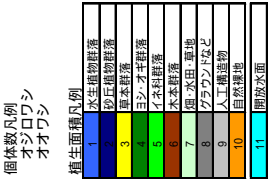
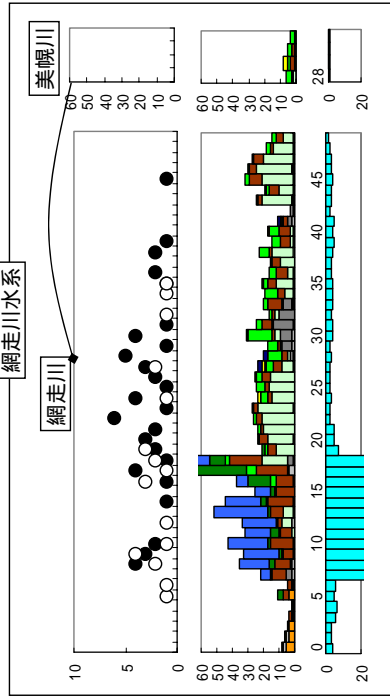
水辺の食物連鎖の上位種であり、また国の天然記念物でもあるオジロワシとオオワシの確認状況を整理しました。

オジロワシ、オオワシともに、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のうち、北海道地方の網走川で確認されました。

（資料掲載： 4-19、 4-39～40 ページ）

オジロワシ、オオワシは、魚や水鳥を主な餌とする大型の猛禽類です。オジロワシはロシア極東地方で繁殖しますが北海道でも少数繁殖し、海岸や湖沼周辺、河川流域の大木に営巣します。冬季には越冬のため本州北部や中部にも飛来します。最近は、人間の活動圏近くで営巣するつがいが増え営巣地はやや増加傾向にありますが、反面人為的影響も大きく繁殖は必ずしも安定していません。オオワシは、ロシアのオホーツク海周辺で繁殖し、越冬のため北海道や本州北部に飛来します。オジロワシ、オオワシともに、晩秋から初冬にかけては主に川を遡るサケ・マス類を餌としますが、極冬期には漁業活動から供給される魚にも依存しています。また、北海道では狩猟で放置されたエゾジカの死体なども食べますが、残留した銃弾を飲み込んで鉛中毒を引き起こす個体が増加したことから、現在では鉛製銃弾によるシカ猟が禁止されています。オジロワシ、オオワシともに、国の天然記念物（文化財保護法）および国内希少野生動物種（種の保存法）に指定されており、また、環境省レッドリスト（2006）によりオジロワシは絶滅危惧 B 類、オオワシは絶滅危惧 類に指定されています。

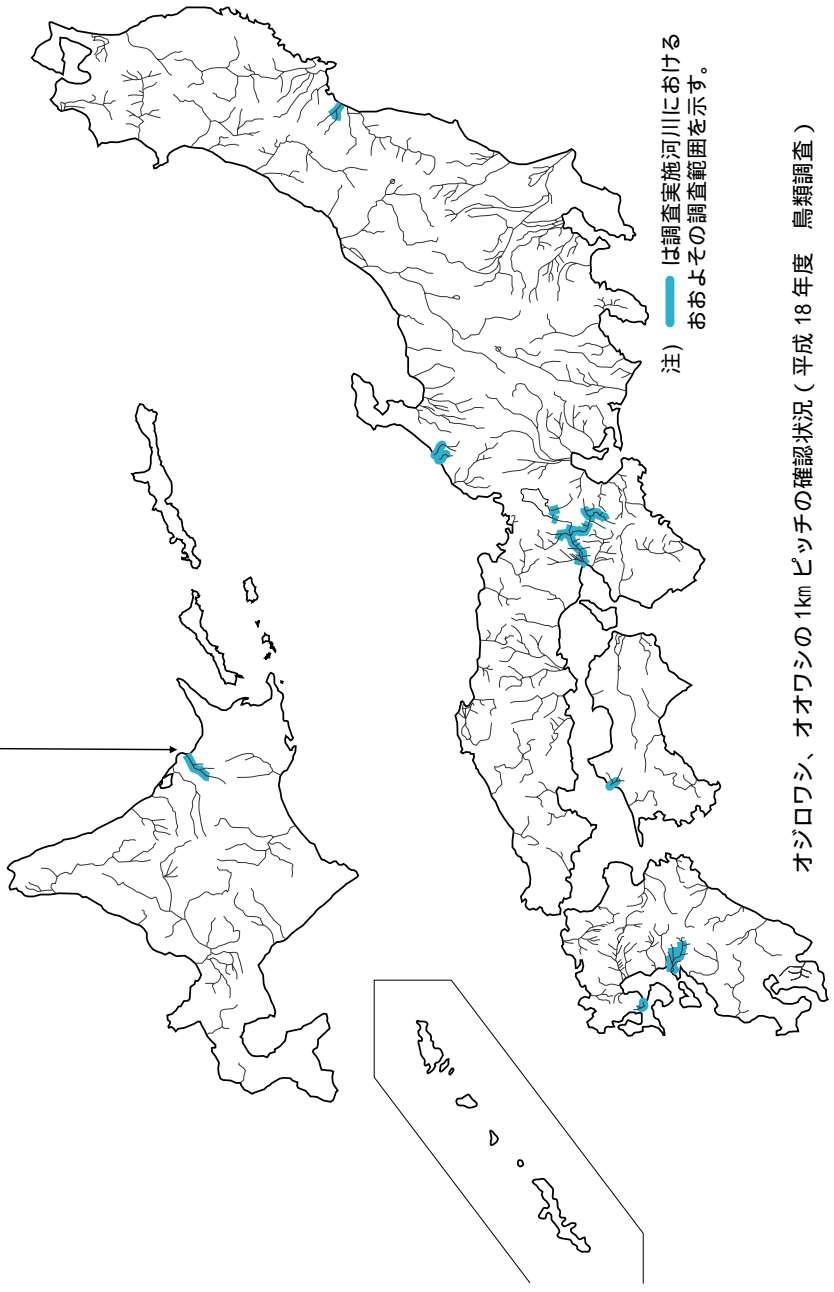
オジロワシ、オオワシとも、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のうち、北海道地方の網走川で確認されました。網走川では、極寒期の氷結した網走湖で厚い氷を切り出して網を入れる氷下待網漁という独特の漁が行われますが、この際商品価値の低い雑魚はその場に捨てられます。これらの魚を狙って、多いときには数百羽のオジロワシやオオワシが集結することもあります。今回確認された位置は、オジロワシ、オオワシとも網走湖から上流まで広範囲にわたっていました。



注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
 注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の国勢調査(植物調査)の結果を用いた。

河川名	実施年度	河川名	実施年度
網走川	2002	木津川	2002
名取川	2005	野洲川	2002
手取川	2002	淀川	2002
榑川	2002	重信川	2002
瀬田川	2005	本明川	2002
津津川	2005	藤川	2005
瀬名川	2004		

注3) ◆——は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。
 注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



注) 調査実施河川におけるおおよその調査範囲を示す。

オジロワシ、オオワシの1kmピッチの確認状況(平成18年度 鳥類調査)

【河川に関わりの深い種（オオヨシキリ、コヨシキリ）の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ **オオヨシキリは全国のすべての河川で確認、コヨシキリは4河川で確認**
ヨシ原で繁殖する代表的な鳥であるオオヨシキリとコヨシキリの確認状況を整理しました。
オオヨシキリは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川全ての河川で確認されました。コヨシキリは4河川で確認されました。

(資料掲載：4-21、4-39～40 ページ)

オオヨシキリは全国のヨシ原に広く分布する種です。コヨシキリも同様に全国のヨシ原に生息しますが、西日本では標高の高いところの背の高い草原で繁殖します。両種は、ともに昆虫類等を餌とします。

オオヨシキリは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川全ての河川で確認され、北海道地方の網走川では、中流部の畑・水田・草地の多いところで確認されました。本州では概ね河川の下流から上流まで広く確認されましたが、木津川上流部のように、河川敷が狭く植生がほとんど見られない区間では確認されませんでした。コヨシキリは、北海道地方の網走川、東北地方の名取川、北陸地方の手取川、梯川の4河川で確認されました。

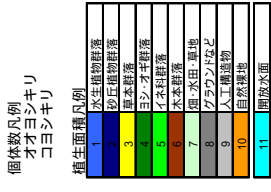
オオヨシキリは、年間を通して10個体以上確認される地点が多くみられましたが、コヨシキリは概ね数個体程度でした。

2巡目、3巡目の確認状況と比較して、大きな差はみられませんでした。

確認河川数の比較 (対象河川：13河川)

種類	2巡目調査	3巡目調査	今回調査
オオヨシキリ	13河川	13河川	13河川
コヨシキリ	3河川	3河川	4河川

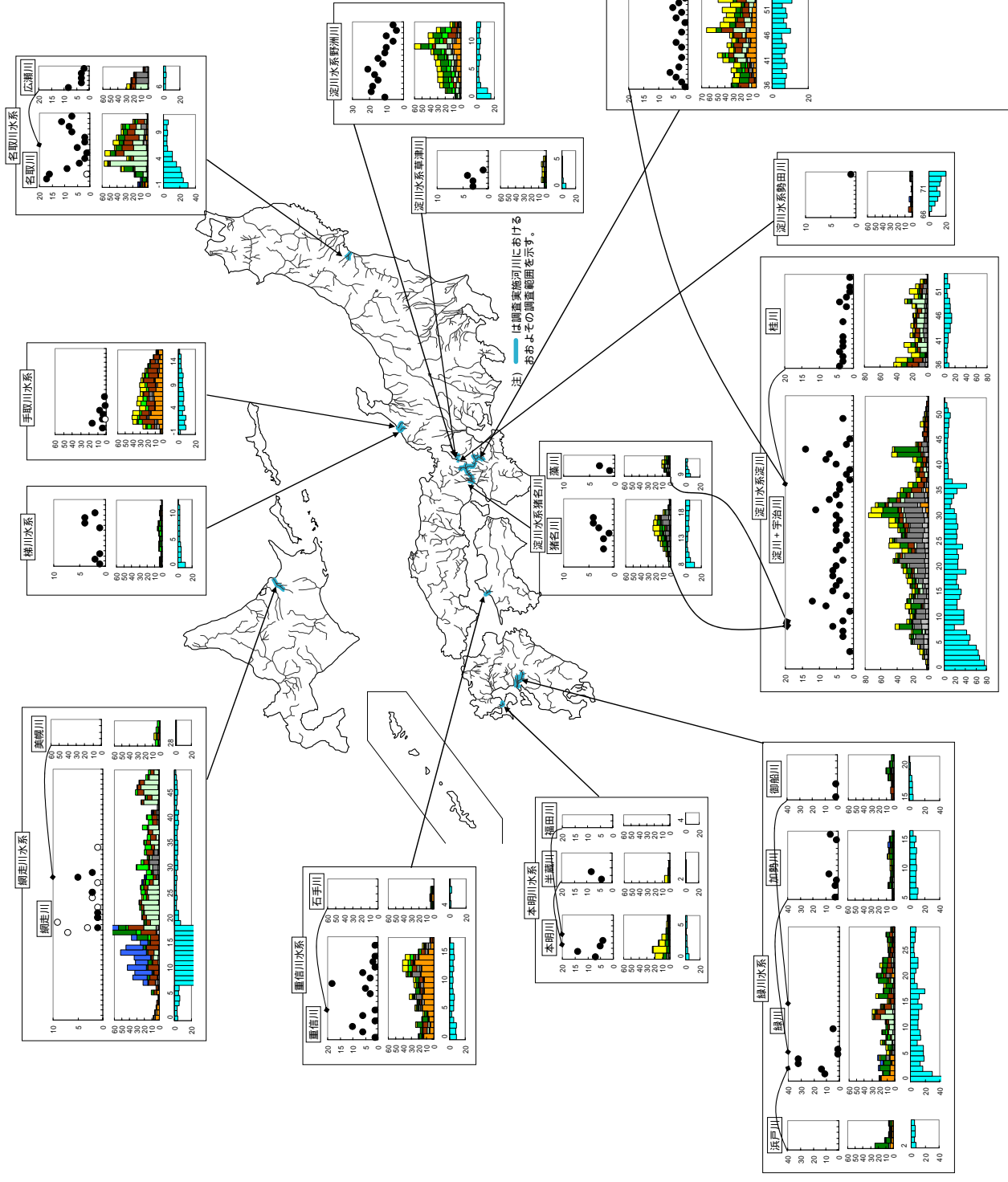
集団分布地、移動時の確認を含む。



注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
 注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の国勢調査(植物調査)の結果を用いた。

河川名	植物調査実施年度	河川名	植物調査実施年度
脚尾川	2002	木津川	2002
名取川	2005	野洲川	2002
桂川	2002	淀川	2002
瀬田川	2002	重信川	2002
宇治川	2005	本明川	2002
猪名川	2005	藤田川	2005
猪名川	2004		

注3) ◆は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。
 注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



オオヨシキリ、コヨシキリの1kmピッチの確認状況(平成18年度 鳥類調査)

【河川に関わりの深い種（カイツブリ）の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ **カイツブリは全国の河川で確認**

ヨシの茂みの中や水草の上に浮巣を造り、水辺に依存性の強いカイツブリの確認状況を整理しました。

カイツブリは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のすべてで確認されました。

(資料掲載： 4-23、 4-39～40 ページ)

カイツブリは、ヨシの茂みの中や水草の上に浮巣を造り、主に小魚や甲殻類、水生昆虫、貝類などを餌としています。西日本ではほぼ周年見られます。縄張り性が強く、本州の太平洋岸や西南日本では一年中つがいで縄張りを形成します。

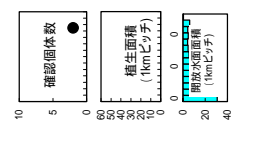
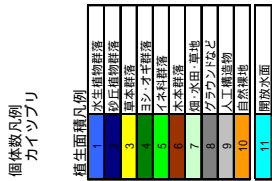
カイツブリは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のすべてで確認されました。確認位置をみると、全国の河川の河口付近から上流までの広範囲にわたっていました。

2 巡目、3 巡目の確認状況と比較して、大きな差はみられませんでした。

確認河川数の比較 (対象河川： 13 河川)

種類	2 巡目 調査	3 巡目 調査	今回 調査
カイツブリ	13 河川	13 河川	13 河川

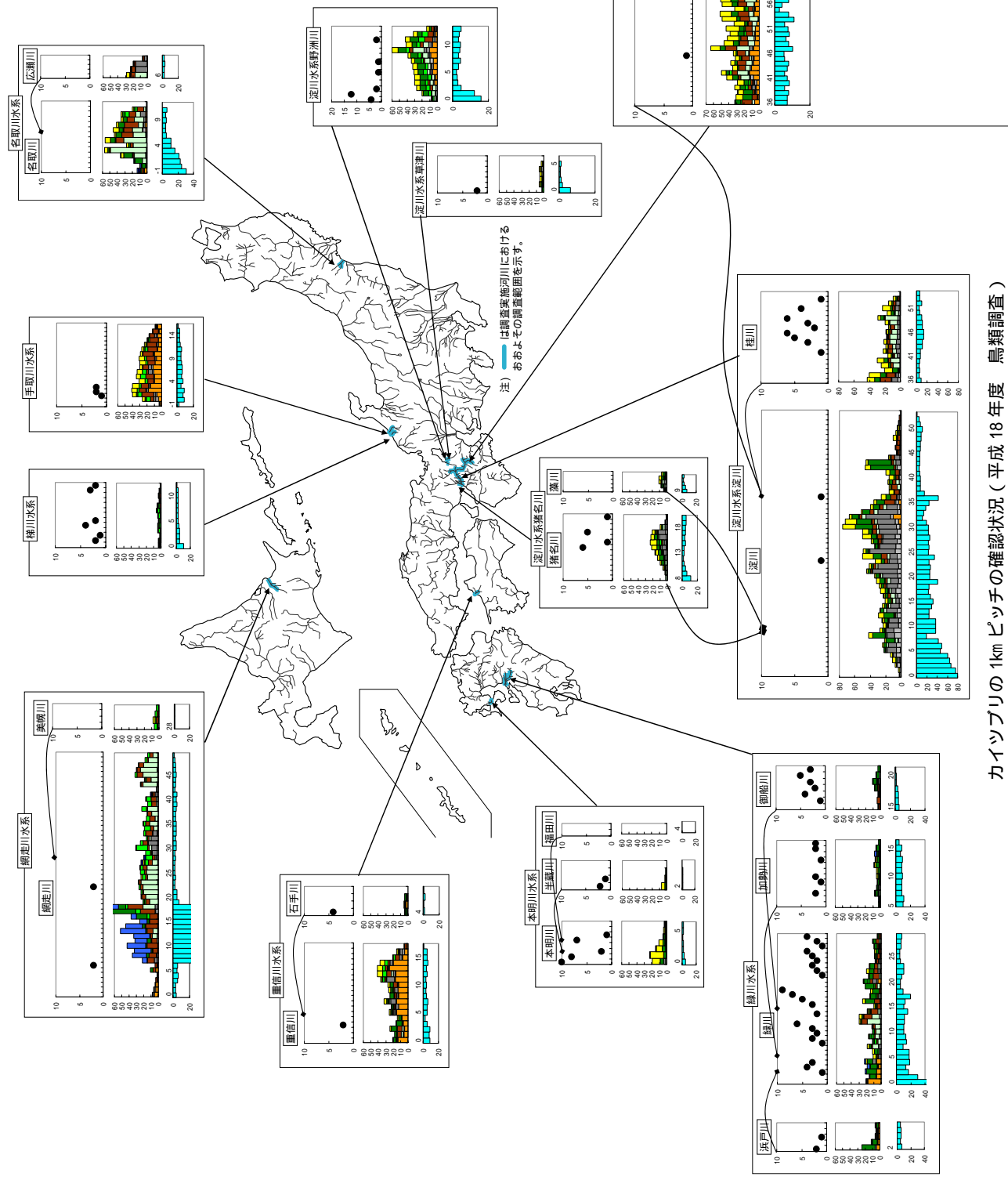
集団分布地、移動時の確認を含む。



注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の国勢調査(植物調査)の結果を用いた。

河川名	植物調査実施年度	河川名	植物調査実施年度
御走川	2002	不津川	2002
名取川	2005	野洲川	2002
手取川	2002	淀川	2002
榑川	2002	重信川	2002
湊田川	2005	本明川	2002
豊津川	2005	綾川	2005
瀬名川	2004		

注3) ◆—は各河川の合流点のおよその位置(河口からの距離)を示す。
注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



カイツブリの1kmピッチの確認状況(平成18年度 鳥類調査)

【河川に関わりの深い種（カワウ）の確認状況】

(鳥類調査)

・ カワウを全国の河川で確認

魚を餌とし、河畔林などに営巣地を持つカワウの確認状況を整理しました。

カワウは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のすべてで確認されました。

(資料掲載： 4-25、 4-39～40 ページ)

カワウは、内湾部や内陸の淡水、河川、湖沼などに生息し、その近くの林などで集団繁殖します。一年を通して群れで生活し、水かきのついた足を使い、尾を舵にして巧みに潜水し、魚類や甲殻類を捕らえます。一時は個体数の減少が心配されたこともありますが、近年増加し、一部の地域では放流されたアユ、アマゴ、ニジマス等に食害を与えている例も知られています。

カワウは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のすべてで確認されました。確認範囲を見ると、ほとんどの河川で河口から上流まで広範囲で確認されていました。

カワウの年間確認個体数は、淀川水系の河川で特に多く、淀川水系淀川の下流部で 700 個体を越える場合もありました。

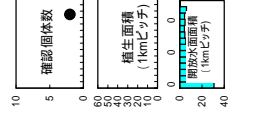
2 巡目、3 巡目の確認状況と比較すると増加傾向にあり、北海道地方の網走川、九州地方の本明川でも、河川水辺の国勢調査としてはじめて確認されました。

確認河川数の比較 (対象河川： 13 河川)

種類	2 巡目 調査	3 巡目 調査	今回 調査
カワウ	10 河川	11 河川	13 河川

集団分布地、移動時の確認を含む。

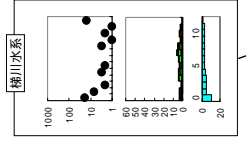
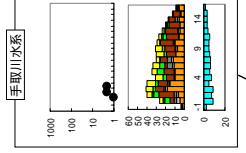
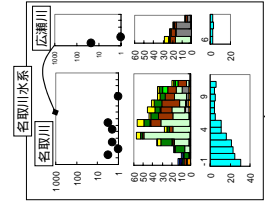
個体約凡例
カワウ



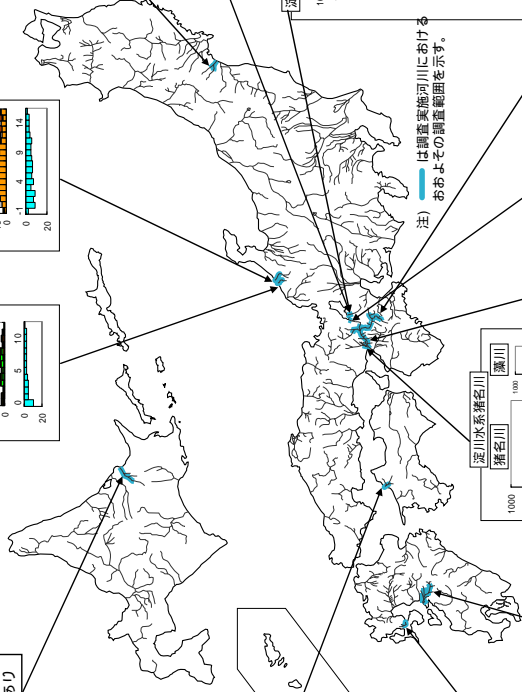
注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の国勢調査(植物調査)の結果を用いた。

河川名	植物調査実施年度	河川名	植物調査実施年度
御足川	2002	本津川	2002
名取川	2005	野洲川	2002
手取川	2002	淀川	2002
瀬川	2002	重信川	2002
瀬田川	2009	本明川	2002
榑津川	2004	榑津川	2005
榑津川	2004	榑津川	2005

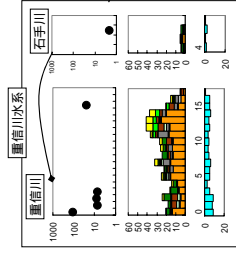
注3) ◆——は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。
注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



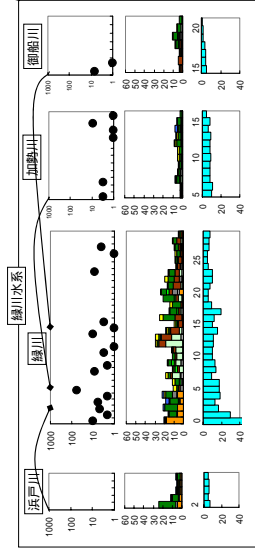
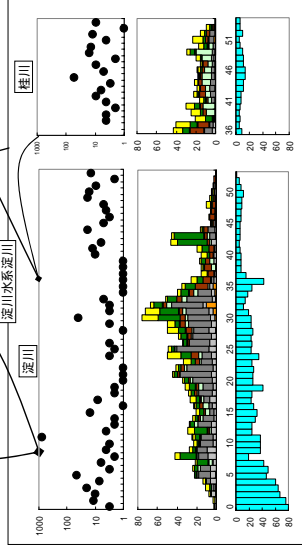
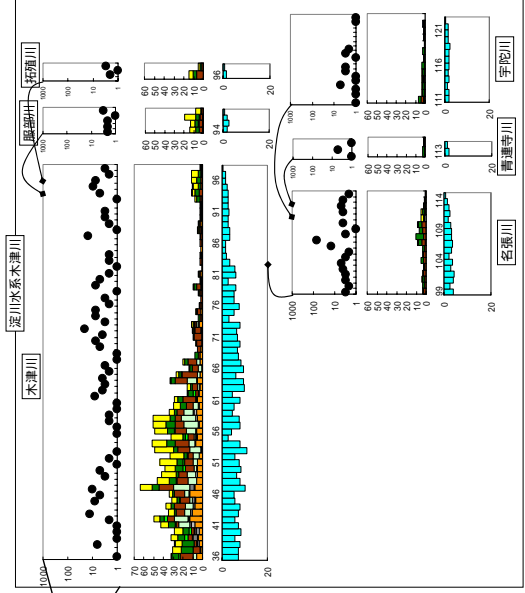
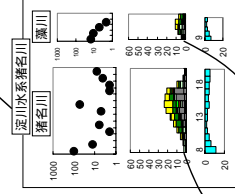
注) 御足川：移動時の確認あり



注) ◆——は調査実施河川におけるおおよその調査範囲を示す。



注) 本明川：移動時の確認あり



【河川に関わりの深い種（カワセミとヤマセミ）の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ **カワセミは日本全国の河川で、ヤマセミは3河川で確認**

小魚を餌とし、土の崖地などを営巣場所とするカワセミとヤマセミの確認状況を整理しました。

カワセミは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のすべてで確認されました。またヤマセミは、3 河川で確認されました。

(資料掲載：4-27、4-39～40 ページ)

カワセミとヤマセミは、ともに北海道地方から九州地方まで広く生息します。カワセミは、北海道では夏鳥、本州以南では留鳥（1 年を通してみられる鳥）であり、ヤマセミは、全国で留鳥です。主に河川や池沼で小魚を餌として生活しており、営巣場所には土の崖地などが必要です。ヤマセミは主に山地や中流域に生息し、カワセミは上流から海岸近くまで生息します。

カワセミは、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のすべてで確認されました。確認された位置は下流から上流に至る広範囲にわたっていましたが、河岸が人工構造物で占められている淀川水系淀川の下流部では確認されませんでした。

ヤマセミは、今回とりまとめを行った 13 河川のうち、淀川水系木津川と九州地方の緑川で確認されました。確認された調査地区は概ね上流域でした。

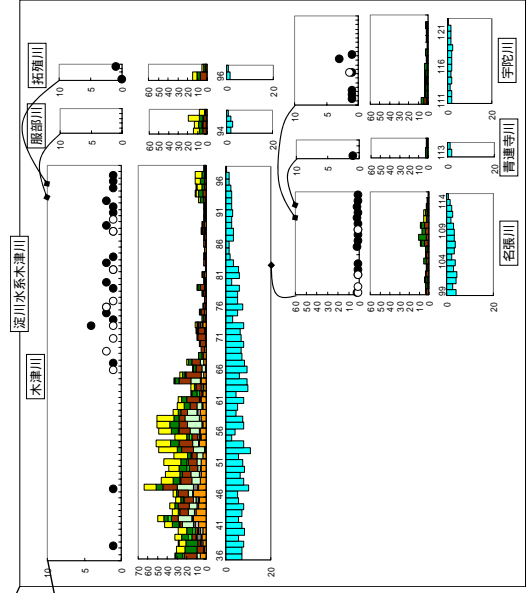
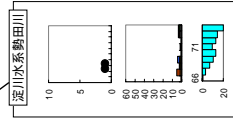
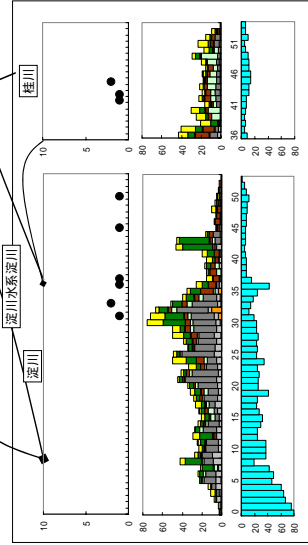
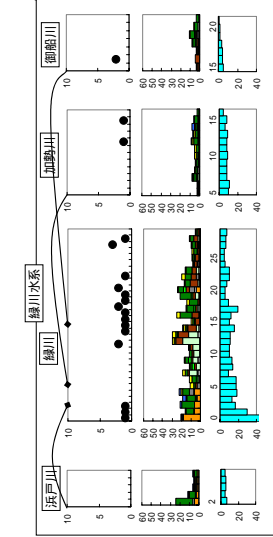
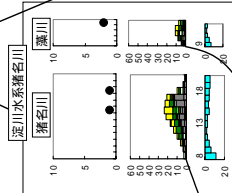
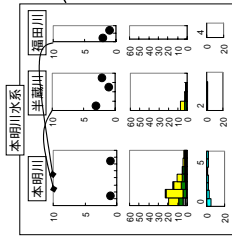
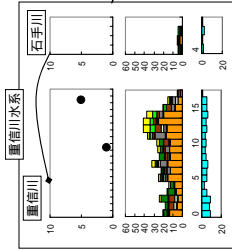
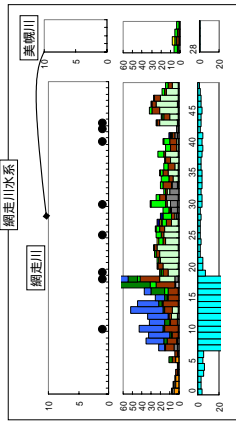
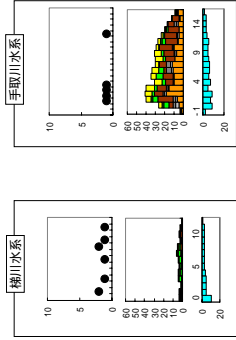
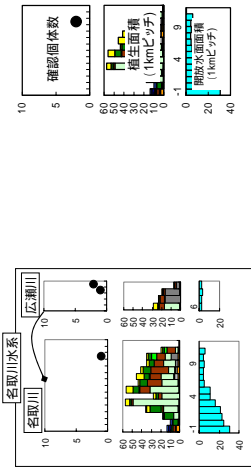
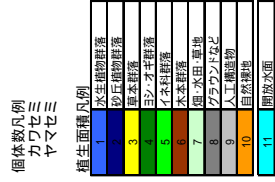
2 巡目、3 巡目での確認状況と比較すると、カワセミは大きな差はみられませんでした。ヤマセミはやや少ない傾向にありました。

確認河川数の比較（対象河川：13 河川）

種類	2 巡目 調査	3 巡目 調査	今回 調査
カワセミ	13 河川	13 河川	13 河川
ヤマセミ	6 河川	6 河川	3 河川 ²

1 集団分布地、移動時の確認を含む。

2 木津川の木津川上流河川事務所管理区間及び淀川河川事務所管理区間をそれぞれ個別にカウントした



河川名	植物調査 実施年度	河川名	植物調査 実施年度
御妻川	2002	本津川	2002
名取川	2002	勢田川	2002
手取川	2002	猪名川	2002
藤川	2002	深川	2002
阿波川	2002	緑川	2002
重信川	2002	本明川	2002
右手川	2002	半蔵川	2002
滝田川	2002	滝田川	2002
勢田川	2002	勢田川	2002
猪名川	2002	猪名川	2002
深川	2004	深川	2005

注1) スポット調査点で確認された河川のみを表示した。
注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の国勢調査(植物調査)の結果を用いた。

注3) ◆は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。

注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。

因は調査対象河川におけるおおよその調査範囲を示す。

【河川に関わりの深い種（キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ）の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ 水辺の鳥であるキセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイを全国のほとんどの河川で確認

良好な河川環境を考えるうえで、河川や水辺に関わりの深いキセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のうち、キセキレイは 12 河川、ハクセキレイ、セグロセキレイは 13 河川すべてと、3 種とも全国のほとんどの河川で確認されました。

(資料掲載：4-29、4-39～40 ページ)

キセキレイは、日本では九州以北で繁殖し、冬は本州中部以南に普通にみられます。平地から山地の川、湖沼の近くに生息します。ハクセキレイは、日本では 50 年ほど前までは本州北部以北が繁殖地でしたが、近年では南進し、本州中部以北と九州、中国地方の一部で繁殖するほか、冬鳥として多数飛来し、冬は本州以南で普通にみられます。海岸、河口、広い河原や水田に生息し、川の上流や山地の水辺には少ないといわれています。セグロセキレイは、主に日本に分布し、北海道から九州まで繁殖し、ほとんどの地方で一年中みられます。中流域の広い河原や湖沼の近くに生息し、都会でも近くに水辺があれば生息できます。

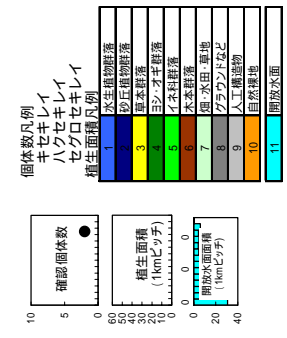
3 種とも、今回とりまとめを行った一級河川 13 河川のうち、全国のほとんどの河川で確認されました。種毎の確認位置をみると、急流河川の北陸地方の手取川、梯川、四国地方の重信川などではキセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイともに、下流から上流域まで広く確認されました。一方、東北地方の名取川や近畿地方の淀川水系など比較的緩やかな河川では、キセキレイは上流域で、ハクセキレイは下流域で、セグロセキレイは中流域から上流域にかけて確認される傾向にありました。

2 巡目、3 巡目での確認状況と比較すると、3 種ともほとんど全ての河川で確認されており、大きな差はみられませんでした。

確認河川数の比較 (対象河川：13 河川)

種類	2 巡目 調査	3 巡目 調査	今回 調査
キセキレイ	13 河川	12 河川	12 河川
ハクセキレイ	13 河川	13 河川	13 河川
セグロセキレイ	13 河川	13 河川	13 河川

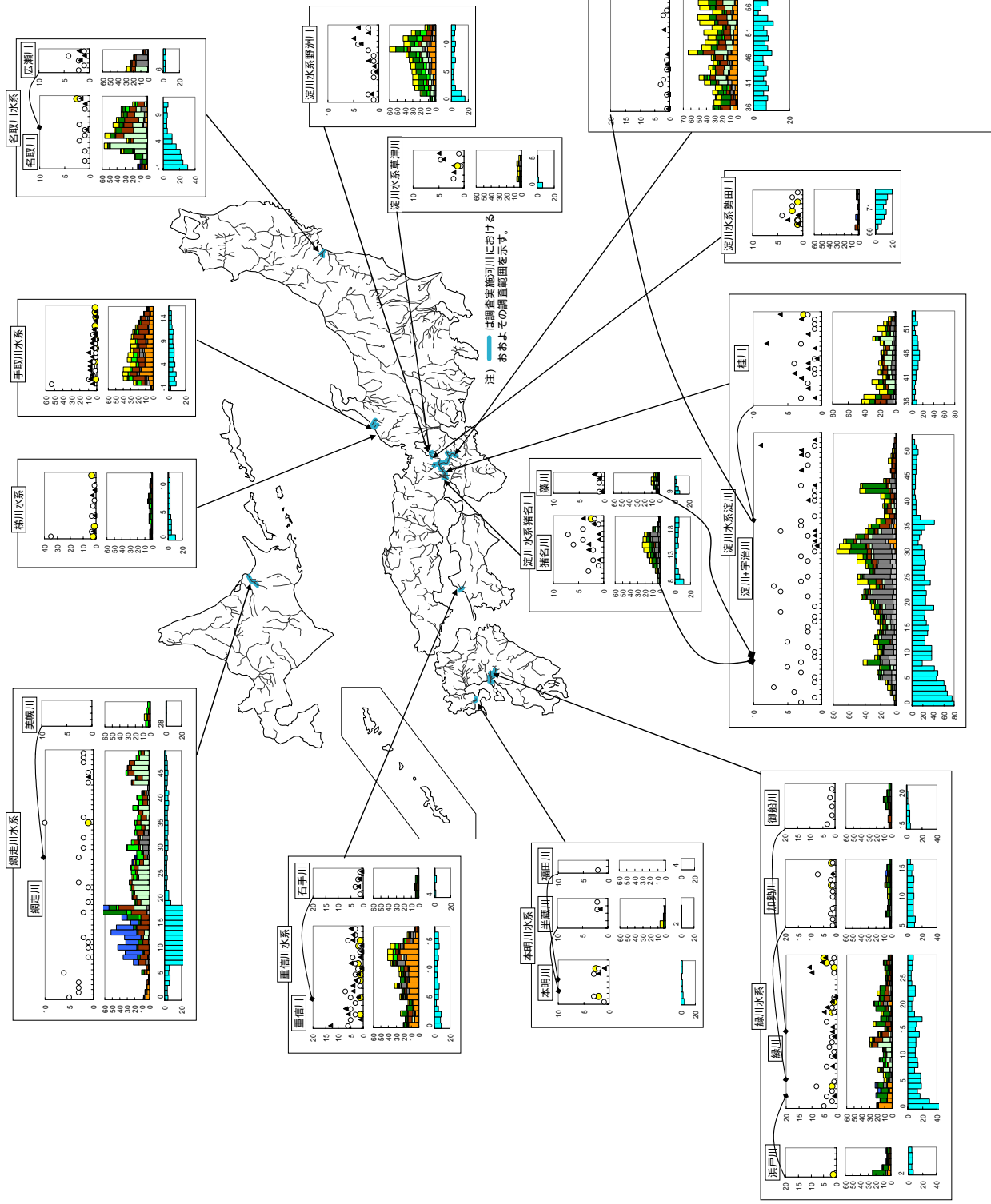
集団分布地、移動時の確認を含む。



注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
 注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の国勢調査(植物調査)の結果を用いた。

河川名	家施年度	河川名	家施年度
柳走川	2002	木津川	2002
名取川	2005	野洲川	2002
手取川	2002	淀川	2002
桂川	2002	重信川	2002
瀬田川	2005	本明川	2002
宇治川	2005	藤川	2005
権川	2004		

注3) ◆は各河川の合流点のおよその位置(河口からの距離)を示す。
 注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



【河川に関わりの深い種（カワガラス）の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ **カワガラスは4河川で確認**

水生昆虫を餌とするカワガラスの確認状況を整理しました。

カワガラスは、今回とりまとめを行った一級河川13河川のうち、4河川で確認されました。

(資料掲載：4-31、4-41～42ページ)

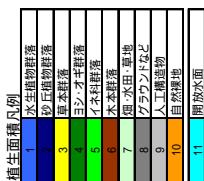
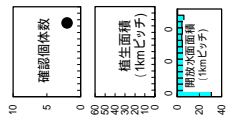
カワガラスは、水生昆虫などを餌として生活しています。滝の裏や堰堤の水抜き穴などを営巣場所とし、主に水質の良好な上流域を生息場所としています。カワガラスは、今回とりまとめを行った一級河川13河川のうち、北海道地方の網走川、北陸地方の手取川、梯川、近畿地方の淀川水系木津川の4河川で確認されました。確認位置は、主に上流域でした。

確認河川数の比較 (対象河川：13河川)

種類	2巡目調査	3巡目調査	今回調査
カワガラス	6河川	6河川	4河川

集団分布地、移動時の確認を含む。

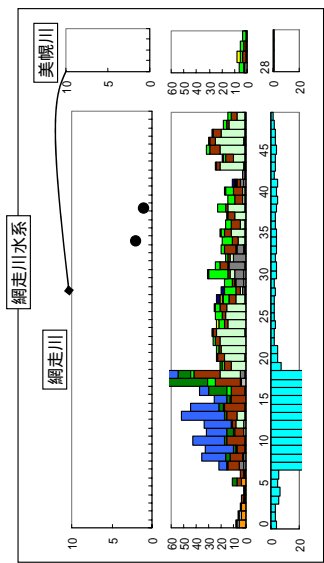
個体数凡例
カワガラス



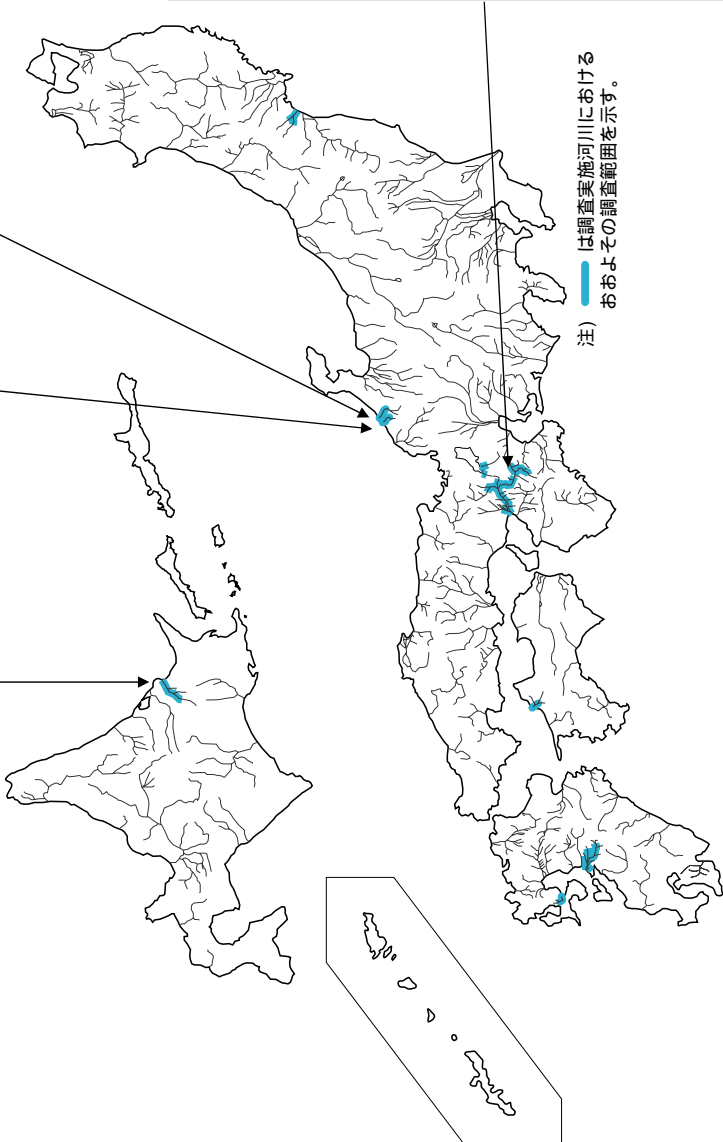
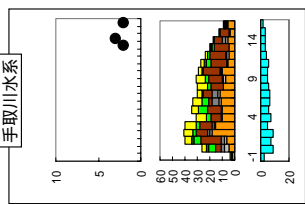
注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の風勢調査(植物調査)の結果を用いた。

河川名	調査年度	河川名	調査年度
網走川	2002	木津川	2002
名取川	2005	野洲川	2002
手取川	2002	淀川	2002
梯川	2002	重信川	2002
湊田川	2005	本明川	2002
草津川	2005	陸川	2005
源名川	2004		

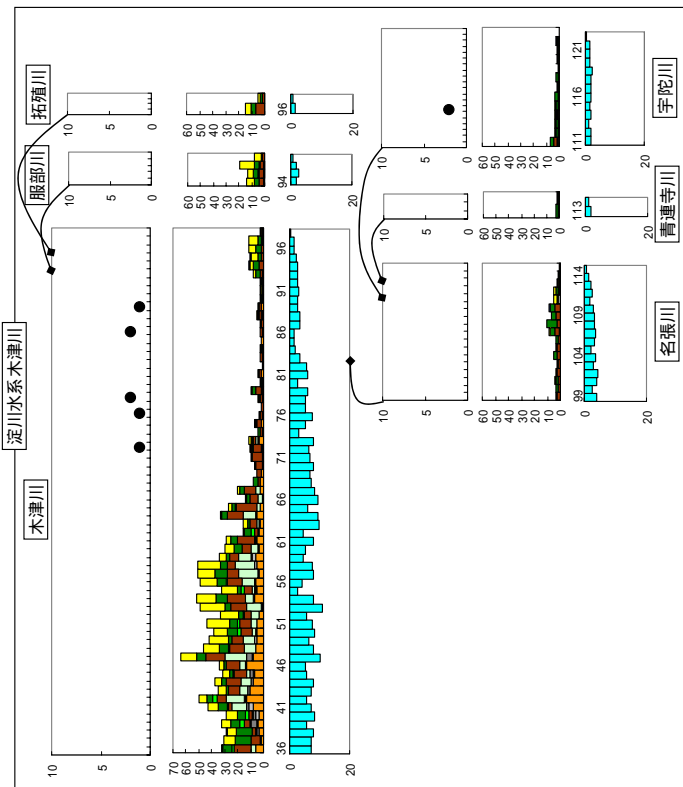
注3) ◆は各河川の合流点のおよその位置(河口からの距離)を示す。
注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。



注) 梯川
移動時確認あり



注) 青蓮寺川におけるカワガラスの調査範囲を示す。



【河川に関わりの深い種（コアジサシ、コチドリ、イカルチドリ）の確認状況】（鳥類調査）

- ・ 砂礫河原で営巣するコアジサシを本州以南の河川の6河川、コチドリを全国の11河川、イカルチドリを12河川で確認

河川での砂礫河原や砂洲の状況を把握するため、砂礫地で営巣するコアジサシ、コチドリ、イカルチドリの確認状況を整理しました。

コアジサシは、今回とりまとめを行った一級河川13河川のうち、本州以南の6河川で確認されました。また、コチドリは全国の11河川、イカルチドリは12河川で確認され、コアジサシは主に下流域で、コチドリ、イカルチドリはより中流域、上流域まで確認される傾向にありました。

（資料掲載：4-33、4-41～42ページ）

コアジサシは赤道を越えてオーストラリアから渡ってくる夏鳥です。日本では本州以南（西）でみられ、海岸や大きな川の河口や中洲のような、砂や砂利の上に簡単な巣を作って2～3個の卵を産みます。個体数が減少しているといわれ、環境省のレッドリスト（2006）では絶滅危惧II類に指定されています。コチドリは、主に夏鳥として飛来し、川の中流から下流の砂礫河原、海岸の砂丘や埋立地などに営巣し、全国で繁殖します。イカルチドリは、日本では留鳥として本州以南（西）で繁殖します。主な生息場所は、コチドリよりも上流の河原で、氾濫原の礫の多いところで営巣し、砂や土の多い埋立地では繁殖しません。

コアジサシは、今回とりまとめを行った一級河川13河川のうち、本州以南の6河川で確認されました。また、コチドリは全国の11河川、イカルチドリは12河川で確認されました。

確認位置をみると、コアジサシは河口付近や下流域で確認され、コチドリ、イカルチドリは、コアジサシより中流域から上流域まで確認されました。

2巡目、3巡目での確認状況と比較すると、全体的に3巡目調査に比べて大きな変化はありませんでした。

確認河川数の比較（対象河川：13河川）

種類	2巡目調査	3巡目調査	今回調査
コアジサシ	8河川	7河川	6河川
コチドリ	12河川	12河川	11河川
イカルチドリ	11河川	13河川	12河川

集団分布地、移動時の確認を含む。

【河川に関わりの深い種（ハマシギ）の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ **ハマシギは本州以南の4河川で確認**

河川での干潟の状況を考える上で、日本に広く分布し、干潟を利用するハマシギの確認状況を整理しました。

ハマシギは、今回とりまとめを行った一級河川13河川のうち、本州以南の4河川で確認されました。

(資料掲載：4-35、4-41～42ページ)

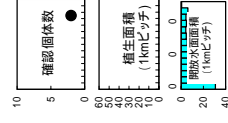
ハマシギは、日本全国の干潟に飛来する渡り鳥で、北海道、東北地方では主に旅鳥、関東以南（西）では主に冬鳥です。ゴカイや小型の甲殻類などを食べます。広大な干潟や河口の砂州や岸边などで、多くのハマシギが集まって群れで活動します。ハマシギは、今回とりまとめを行った一級河川13河川のうち、本州以南の4河川で確認され、確認時期は、越冬期もしくは春の渡りの時期でした。

確認河川数の比較（対象河川：13河川）

種類	2巡目調査	3巡目調査	今回調査
ハマシギ	5河川	7河川	4河川

集団分布地、移動時の確認を含む。

個体数凡例
ハマシギ



植生面積凡例

1	水生植物群落
2	砂丘植物群落
3	草本群落
4	ヨシ・エビ群落
5	イネ科群落
6	木本群落
7	畑・水田・草地
8	グラウンドなど
9	人工構築物
10	自然裸地
11	開放水面

注1) スポット調査点で確認された河川のみ表示した。
注2) 植生面積は各河川の最も近年に行われた河川水辺の国勢調査(植生調査)の結果を用いた。

河川名	植生調査実施年	河川名	植生調査実施年
御舟川	2003	本郷川	2002
名取川	2005	緑川	2002
手取川	2002	加勢川	2002
緑川	2002	石手川	2002
御舟川	2005	重信川	2002
加勢川	2005	重信川	2002
石手川	2005	重信川	2002
重信川	2004		

注3) ◆は各河川の合流点のおおよその位置(河口からの距離)を示す。
注4) 集団分布地調査および移動時確認は含まない。

注) 名取川
移動時の確認あり

注) 調査実施河川における
おおよその調査範囲を示す。

